

弘田川改修に伴う  
埋蔵文化財発掘調査概報

弘田川西岸遺跡

平成 7 年度



1996. 3

香川県埋蔵文化財研究会

## 例　　言

1. 本書は、弘田川改修事業に伴い平成7年度に実施した弘田川西岸遺跡の発掘調査の概要を記録したものである。
2. 本調査は、香川県土木部河川課からの依頼を受け、香川県教育委員会が調査主体となり、財団法人香川県埋蔵文化財調査センターが調査担当者として実施した。
3. 本年度の調査組織は、次のとおりである。

財団法人香川県埋蔵文化財調査センター

総括	所長	大森 忠彦
	次長	真鍋 隆幸
総務	参事	別枝 義昭
	係長	前田 和也
	主査	西村 厚二
調査	参事	糸目 末夫
	係長	藤好 史郎
	文化財専門員	片桐 孝浩
	文化財専門員	谷畠 雅穂
	調査技術員	高橋 佳緒里

4. 調査にあたっては、次の機関や方々の協力を得た。記して謝意を表したい。

香川県土木部河川課、香川県善通寺土木事務所、周辺各自治会

5. 本書の執筆は調査担当者が分担して行い、編集は片桐が行った。
6. 本書で使用した遺構略号は、次のとおりである。  
S H…堅穴住居      S K…土坑      S D…溝      S B…掘立柱建物
7. 本書で用いる方位の北は磁北で、標高はT. P. を基準としている。
8. 挿図の一部は、国土地理院地形図(1/25,000)を使用した。

## 本文目次

1. 調査の経緯と経過	(藤好・谷畑)	1
2. 遺跡の立地と環境	(谷畑)	2
3. 調査成果の概要	(片桐)	4
4. 遺構・遺物について	(片桐)	7
5.まとめ	(片桐)	18

## 挿図目次

第1図 周辺遺跡位置図(1/25,000)	3
第2図 第I調査区遺構平面図	4
第3図 調査区割図	5~6
第4図 第II・III調査区遺構平面図	5~6
第5図 第IV調査区遺構平面図	7
第6図 S H03出土遺物実測図	8
第7図 S H03平・断面図	8
第8図 S H27出土遺物実測図	9
第9図 S H27平面図	9
第10図 S H38平・断面図	10
第11図 S H38出土遺物実測図	11
第12図 S H42平・断面図	11
第13図 S H42出土遺物実測図	12
第14図 S H44平・断面図	12
第15図 S H44出土遺物実測図	12
第16図 S P706出土遺物実測図	13
第17図 S B01平・断面図	14
第18図 S B02平・断面図	14
第19図 S B03平・断面図	15
第20図 S T01・02平・断面図	16
第21図 S P198平面図	17
第22図 S P198出土遺物実測図	17

写真1 第I調査区遺構検出状況(南東より)	写真8 S H35・42・43・44検出状況(北東より)
写真2 第II調査区南部遺構検出状況(南東より)	写真9 S B01・02検出状況(北より)
写真3 第III調査区北部遺構検出状況(北より)	写真10 S B03検出状況(北より)
写真4 第III調査区遺構検出状況(北西より)	写真11 S T01・02検出状況(東より)
写真5 S H03検出状況(南より)	写真12 S T02断面
写真6 S H27検出状況(北より)	写真13 S T01断面
写真7 S H38検出状況(南東より)	写真14 S P198検出状況(南北より)

## 1. 調査の経緯と経過

旧練兵場遺跡群の中心とされる四国農業試験場の西700m、善通寺西遺跡の北600mのところに、弘田川が大きく蛇行してきた半円形の土地がある。ここに、善通寺自動車学校が建設されたのは昭和37年のことであり、工事中に多数の弥生土器や甕棺が出土したことから、何らかの遺構の存在が考えられた。昭和58年には自動車学校が移転し、河川改修工事によって弘田川が自動車学校跡地を南北に縱断する形で付け替えられることになり、遺構の破壊が考えられるため遺跡の内容・範囲などを確認する必要が生じ、昭和59年4月から昭和60年3月にかけて発掘調査を実施した。これが彼ノ宗遺跡である。彼ノ宗遺跡は、弘田川西岸遺跡の北に隣接している。

平成6年香川県教育委員会は香川県土木部河川課と、弘田川河川改修事業の工事区域内に所在する埋蔵文化財の取り扱いについて協議を行った。その結果工事予定地内の埋蔵文化財については、適切な保護処置をはかる点で合意した。

当該地の保護処置の必要な範囲は6,390m<sup>2</sup>であり、香川県教育委員会は財団法人香川県埋蔵文化財調査センターと、平成7年4月1日付けで「埋蔵文化財調査契約書」を締結した。

本調査の調査方法は、以下の方法による。

- ① 調査区は北よりI～V区の5区分とした。(途中I～IV区に変更)
- ② 遺構の測量は航空測量とした。
- ③ 作業員は直當での雇用とした。

発掘調査期間は、当初一年間となっていたが、調査開始後にI区およびII区の包含層掘削(機械掘削)の結果と調査対象内の地形から隣接する現弘田川がかなり蛇行していることが予想された。そのためII～V区について予備調査を行った。

予備調査は調査区を横断する方向で第1～6のトレンチを設定し、遺構面の範囲確定を行った。その結果、調査区内(II～V区)の東側は旧弘田川によって削平を受けていることを確認した。そのため、調査対象面積は調査開始前の6,390m<sup>2</sup>から5,231m<sup>2</sup>に変更し、調査区分もI～IV区に変更して調査を継続した。

調査は平成7年4月1日より、平成7年11月30日の期間で実施した。4月前半は現場事務所などの仮設工事、後半よりI・II区から機械掘削にかかり、遺構掘削は4月末からI区より行い、7月中旬に調査を終了した。小面積の割には遺構の密度が高く、竪穴住居跡・溝状遺構・土坑・小児土器棺墓・柱穴・掘立柱建物など多数の遺構が検出された。II～IV区は調査区内のほぼ半分を旧流路によって影響を受けていたが、それ以外では、特にII区南部・III区北部において狭い範囲の中で重複した状態で竪穴住居跡を検出するなど、遺構の密度は極めて濃い状態であった。IV区においては、遺構密度は稀薄であった。また、II区南部・III区北部の弥生時代の地山と思われる層には、多量の縄文時代後期の土器を包含していることも確認した。11月下旬には、基礎整理・仮設備の撤去などを実施し、現地調査を終了した。

## 2. 遺跡の立地と環境

弘田川西岸遺跡は、丸亀平野の南西部、善通寺市善通寺町に所在する。西には讃岐の中世山城を代表する天霧城跡が山頂部に所在する雨霧山、西から東にかけて火上山・中山・我拝師山・筆の山・香色山が麓をつらねて並び五岳と呼ばれている。その南には、中山に連なる東部山、有岡の里を経て大麻山がそびえている。当遺跡は、五岳の一つである筆の山の麓、弘田川の西岸に位置している。本遺跡の北には彼ノ宗遺跡が接していることから、彼ノ宗遺跡から連続する遺跡であり、旧練兵場遺跡群の西端部であろうと思われる。また、弘田川を600m程上流に進むと善通寺西遺跡があり、善通寺西遺跡の南西にある香色山の山頂で経塚が発見されたことは記憶に新しいところである。

旧石器時代・縄文時代について、丸亀平野ではこれまで不明な点が多くあった。しかし、縄文時代中期までの土器は出土しないものの、四国横断自動車道関連調査で永井遺跡などで縄文時代晩期までの土器が多量に出土している。

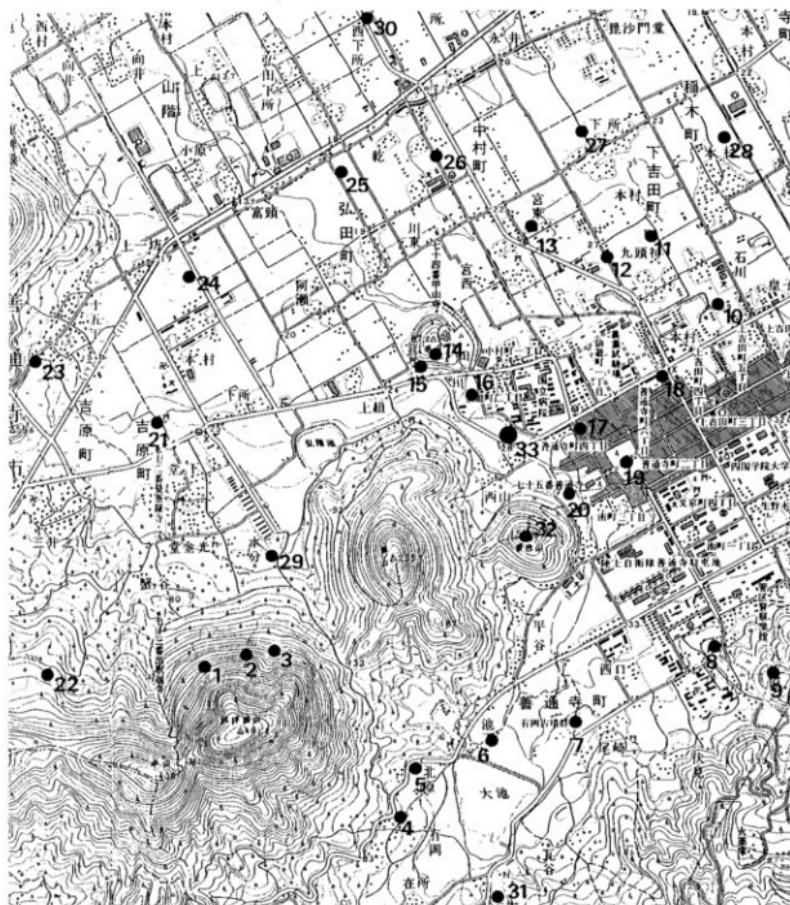
弥生時代になると丸亀平野での遺構・遺物の報告例が多くなり、弥生時代の集落は、前期から後期の全時期を通して広く営まれている。しかし、弥生時代前期から中期にかけての集落は長く続かず、中期中頃には廃絶し移動しているのに対して、旧練兵場遺跡群内の遺跡は、弥生時代中期から古墳時代後期まで連綿と集落が営まれている。この遺跡群内には、善通寺西遺跡・仲村廃寺・仙遊遺跡・彼ノ宗遺跡などがある。

善通寺市周辺の弥生時代の遺跡から多くの青銅器が出土することも特徴のことである。陣山・大麻山で銅劍・銅鐸が出土し、有岡の谷周辺では銅劍・銅鐸・銅鉢が多数出土している。また、我拝師山でも銅劍・銅鐸・銅鉢が出土している。この銅鉢は、大阪の東奈良遺跡の鋳型で作られたことが判明している。

古墳時代前期のこの地域の特徴の一つは、海拔約400mの高地に築かれた野田院古墳をはじめ椀貸塚古墳・経塚古墳・丸山1号墳・同2号墳・大窪古墳などの積石塚が大麻山の北東部山麓から火上山山麓にかけて築造されていることである。

市内の前方後円墳においては、平野奥部の磨白山から池下に至る約2kmの間に、磨白山古墳・鶴ヶ峰4号墳・丸山古墳・王墓山古墳・菊塚古墳など5基以上の古墳が近接し、しかもほぼ東西一直線上に築造されている。その他、古墳時代後期には宮が尾古墳に代表されるような線刻画で装飾された古墳が計8基確認されている。

律令時代の行政区分では、善通寺市は東の「那珂郡」と西の「多度郡」に分かれていたと考えられ、郡境は金倉川と推定されている。金蔵寺下所遺跡は、この郡境付近に位置する。検出された遺構は、柱穴の掘り方が方形を呈する掘立柱建物20棟と溝状遺構などで、奈良時代を中心とした時期のものである。この建物群とほぼ同時期のものが稻木遺跡・矢ノ塚遺跡・西碑殿遺跡でも検出されおり、南海道であったとされる近辺での遺跡であるため古代の善通寺市を知る上で手がかりとなる。



- |             |           |            |             |
|-------------|-----------|------------|-------------|
| 1 我拝師山B遺跡   | 2 我拝師山C遺跡 | 3 我拝師山A遺跡  | 4 北原古墳      |
| 5 北原シンネバエ遺跡 | 6 菊塚古墳    | 7 王墓山古墳    | 8 丸山古墳      |
| 9 鶴ヶ峰4号墳    | 10 石川遺跡   | 11 下吉田八幡遺跡 | 12 九頭神遺跡    |
| 13 仲村城跡     | 14 甲山城跡   | 15 甲山北遺跡   | 16 彼ノ宗遺跡    |
| 17 仙遊遺跡     | 18 仲村廃寺   | 19 善通寺     | 20 善通寺西遺跡   |
| 21 青龍古墳     | 22 大窪古墳   | 23 矢ノ塚遺跡   | 24 上一坊遺跡    |
| 25 乾遺跡      | 26 中村遺跡   | 27 永井遺跡    | 28 稲木遺跡     |
| 29 大塚池古墳    | 30 三井遺跡   | 31 宮が尾古墳   | 32 香色山山頂遺跡群 |
| 33 弘田川西岸遺跡  |           |            |             |

第1図 周辺遺跡位置図 (1/25,000)

### 3. 調査成果の概要

#### 1. 各調査区の概要

弘田川西岸遺跡は丸亀平野の西端、普通寺市普通寺町909-1番地外に位置する（第1図）。ここは金倉川・弘田川などの河川によって形成された肥沃な沖積平野で、これまでの発掘調査の結果、繩文時代から近世にかけての遺構を検出している。特に弥生時代の大規模な集落遺跡である旧練兵場遺跡は彼ノ宗遺跡・中村庵寺・九頭神遺跡や国立普通寺病院内の各調査を通して、その実態がかなり判明した。当遺跡は旧練兵場遺跡の一部と考えられ、その西端部に位置している。

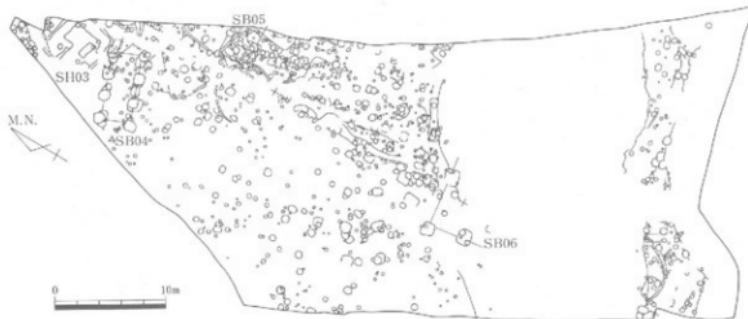
調査区は現弘田川を挟み、北に第I調査区、南に第II調査区から第IV調査区を設定した。弘田川はかなり蛇行しており、第II調査区から第IV調査区までは調査区に平行して流れ、第I調査区と第II調査区の間を大きく「く」の字に西に屈曲する。

第I調査区は昭和59年度に調査を実施した彼ノ宗遺跡に隣接している。そのためにはぼ彼ノ宗遺跡と同様な遺構・遺物が出土している。

第I調査区では弥生時代前期から7世紀にかけての竪穴住居・掘立柱建物・溝・土坑・多数の柱穴などの遺構を検出した。調査区南部ではS R01が東西に流路を取り、その南に僅かに遺構面を残し、さらにS R02の北岸を検出した。北部の遺構面と南部の遺構面で検出した遺構はほぼ同時期であることからS R



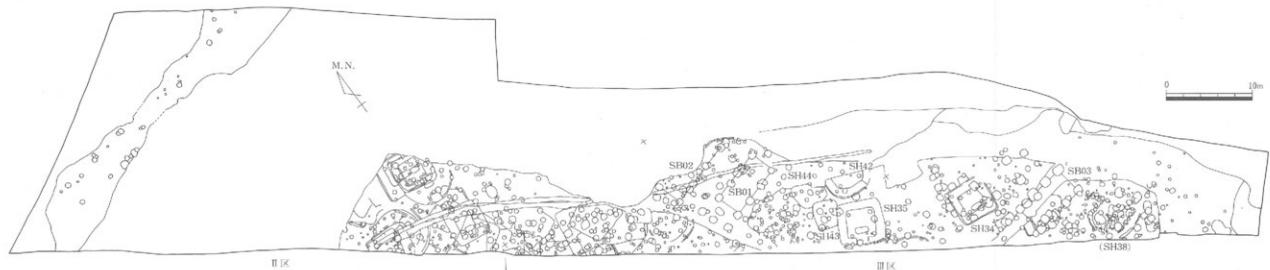
写真1 第I調査区遺構検出状況(南東より)



第2図 第I調査区遺構平面図



第3図 調査区割図(弘田川の旧流路復原)



第4図 第II・III調査区遺構平面図



写真2 第II調査区南部遺構検出状況(南東より)

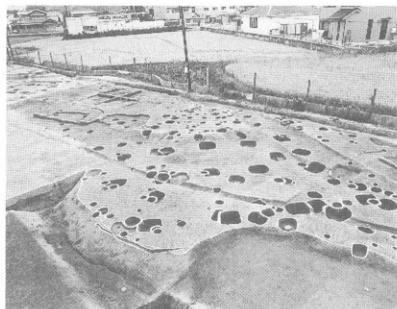


写真3 第III調査区北部遺構検出状況(北より)



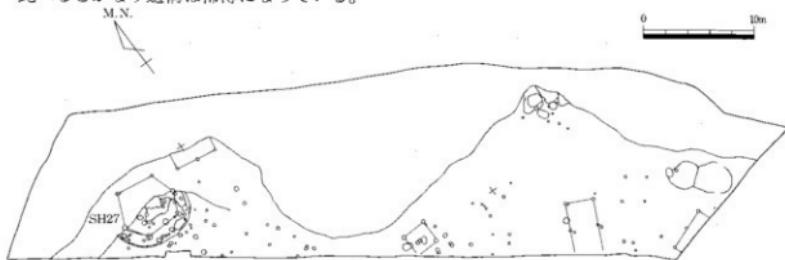
写真4 第III調査区遺構検出状況(北西より)

01は7世紀以降にできた流路であることが判明した。また、このことはS R01出土遺物が古代から中世であることからも裏付けられた。

第II調査区から第IV調査区は、弘田川の西岸に位置する。

第II・III調査区では、第I調査区と同時期の竪穴住居・掘立柱建物・溝・土坑・柱穴などの遺構を検出した。また、弘田川の旧流路も検出でき、第I調査区の状況とあわせるとかなり流路をかえて流れていることが判明した(第3図)。そのため遺構平面図(第4図)からも判るように調査区のはば東半分は弘田川の旧流路(S R05)によって削られている。

第IV調査区では、竪穴住居・掘立柱建物・土坑・柱穴を検出しているが、第I~III調査区に比べるとかなり遺構は稀薄になっている。



第5図 第IV調査区遺構平面図

## 2. 遺構・遺物について

弘田川西岸遺跡で検出した遺構は、竪穴住居跡67棟、掘立柱建物跡15棟、土器棺墓3基、土坑21基、柱穴多数である。時期は弥生時代前期から古墳時代及び7世紀にかけてである。

### 竪穴住居跡

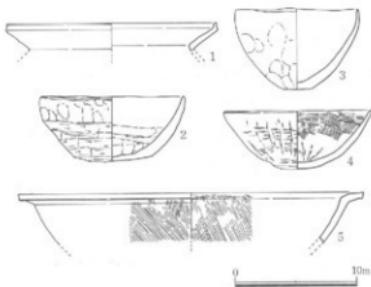
平面形態には円形のものや隅丸方形・長方形とバラエティーに富む。弥生時代の方形及び円形の竪穴住居は、そのほとんどが中央に炉を持ち、周囲にはベッド状遺構が確認されている。また、平面形態が長方形の竪穴住居は、主柱穴が2本で中央に炉を持つもので、平面形態が方形で4本主柱穴の竪穴住居と構造の差が認められる。

### S H 0 3 (第7図)

S H 0 3は第I調査区北部で検出した竪穴住居である。平面形態は方形を呈し、規模は一辺が約4.8mで、検出面からの深さが約0.3mを計る。床面には変則的ではあるが、ほぼ周囲にベッド状遺構を持ち、さらに周囲に壁溝が確認されている。主柱穴は4本で、土層から約20cm程度の柱痕が確認できる。ほぼ中央に焼土及び炭が確認できることから、炉であることがわかり、近接してその炭を掘り入れたと思われる長方形の土坑を検出した。

出土遺物は大別して、上層(第1層)・下層と床面直上及び土坑出土遺物として取り上げた。ここでは土坑出土の遺物(第6図1・2)と床面直上の遺物(第6図3・4・5)を一部掲載する。

1は壺で「く」の字に屈曲する頸部から直線的に延び、口縁端部は上方に小さく摘み上げる。2は鉢で体部下半及び底部をへら削りし、底部を平底状にする。3~5は鉢である。3は小さい平底から体部が内彎するやや深めのもので、5は頸部を屈曲させるやや大きめの鉢である。



第6図 SH03出土遺物実測図

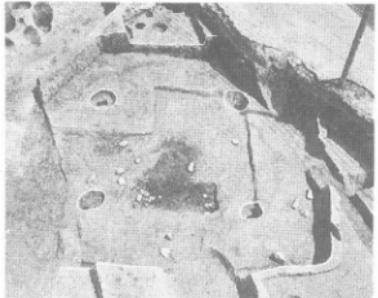
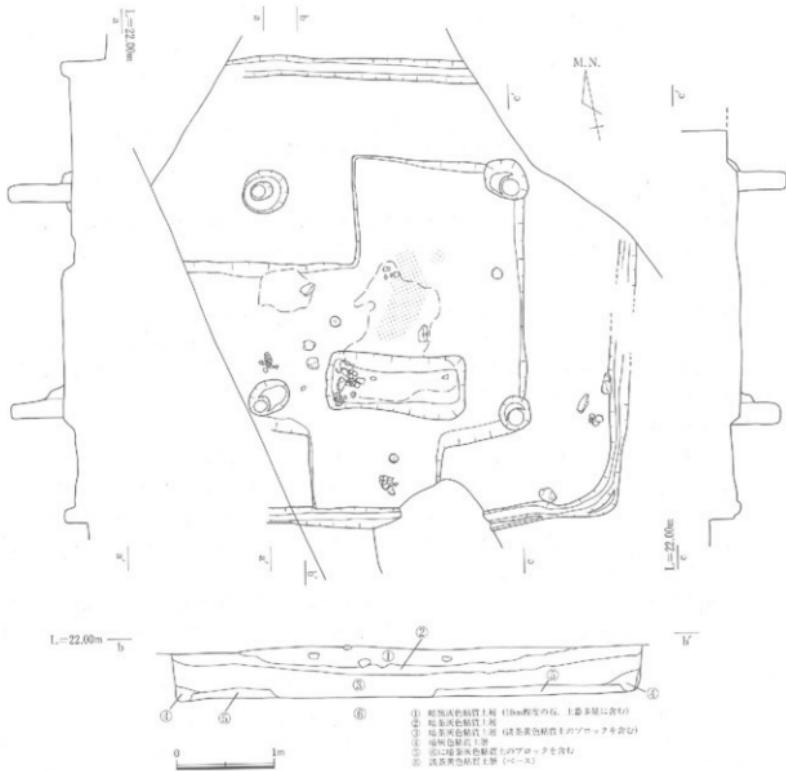


写真5 SH03検出状況(南より)



第7図 SH03平・断面図

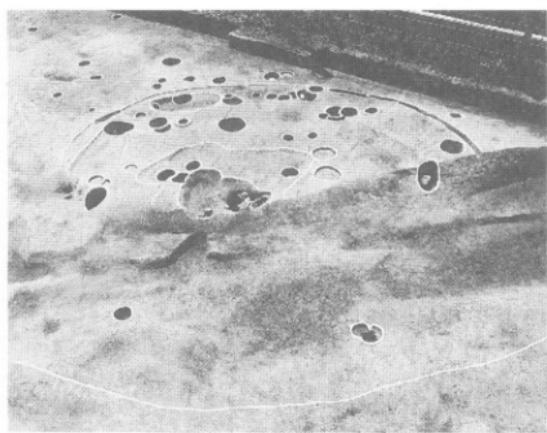
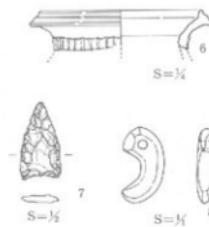
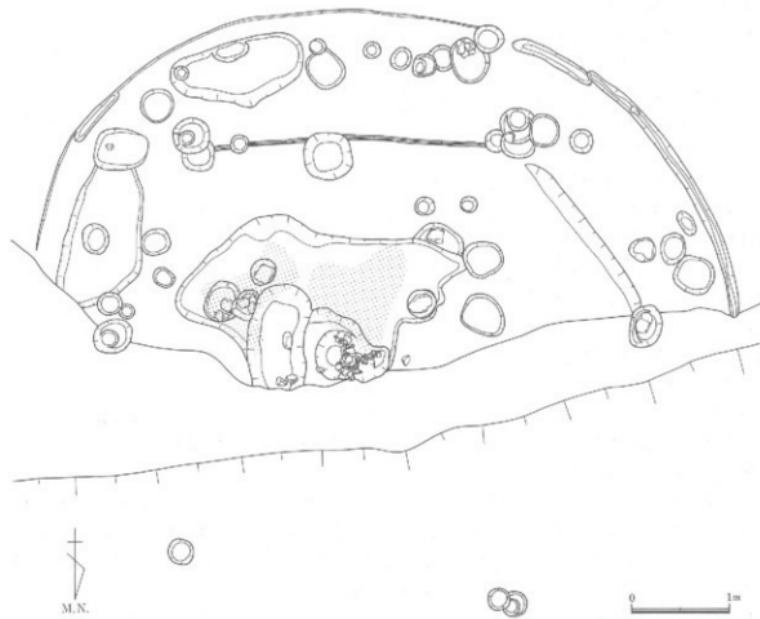


写真 6 SH27検出状況(北より)



第8図 SH27出土遺物実測図



第9図 SH27平面図

体部内外面に細かい刷毛目が施されている。

時期は弥生時代後期終末である。

また、上層からは弥生時代後期のものに混じって、古墳時代後期（6世紀前半）頃の須恵器壺身・壺蓋がかなり多量に出土していることからこの竪穴住居が最終的に埋没した時期は、古墳時代後期と考えられ、その間約300年間は凹み状になっていたことが想定される。

### S H 2 7 (第9図)

S H 2 7 は第IV調査区北部で検出した竪穴住居である。北半分を旧流路によって削平を受けているが、復元すると平面形態は円形を呈する。規模は復元径が約7.4mで、検出面からの深さは約0.03mを計る。検出された南半分から床面には内形が六角形のベッド状遺構があるものと考えられ、主柱穴はそのベッド状遺構のコーナーに計6個を検出した。また、周囲には壁溝が確認できる。ほぼ中央に焼土及び炭が確認できることから、炉であることがわかり、またその炭を搔き入れたと思われる橢円形状の土坑を検出した。

竪穴住居内からは壺、甕、ガラス製小玉、勾玉などが出土している（第8図）。

6は炉から出土した壺である。頸部を屈曲させ、口縁端部を上下に拡張し、外面には2条の凹線を持つものである。頸部外面には指頭圧痕文凸帯をめぐらしている。7・8は床面直上出土の遺物である。7はサスカイト製の石鏃で、8は蛇紋岩製の勾玉である。

時期は弥生時代中期後半である。

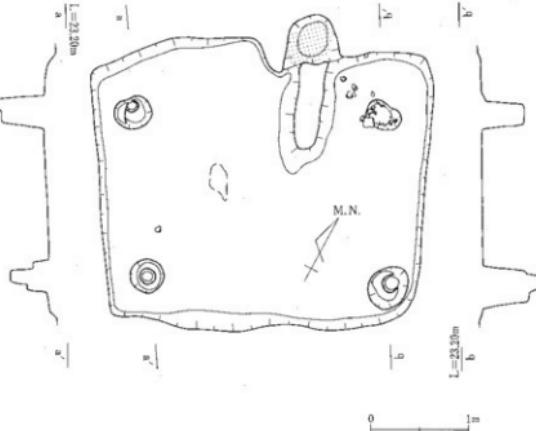
### S H 3 8 (第10図)

S H 3 8 は第III調査区南部で検出した竪穴住居である。平面形態は長辺が約3.3m、短辺3.0mの隅丸方形を呈し、検出面からの深さが約0.1mを計る。北辺部やや東よりに造り付けの竈を持つもので、竈内床面は赤変している。竈の上部構造は削平により不明。主柱穴はコーナーに4本で、柱穴土層から約15cm程度の柱痕が確認できる。

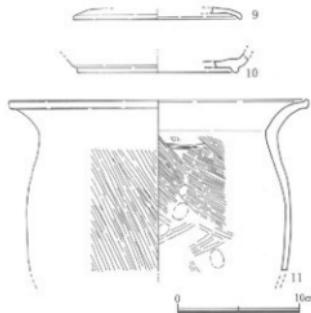
竪穴住居内からは須恵器高台付杯身や土師質甕などが出土している（第11図）。

9は須恵器壺蓋である。口縁端部をやわらかく下方に屈曲させる。10は須恵器高台付壺身である。底部から体部へは棱を持たず屈曲させる。底部縁辺部に外方に踏張る断面方形の高台を持つ。11は土師質の甕である。卵形の胴部から頸部が「く」の字に屈曲し、口縁端部を上方に摘み上げる。体部内外面には斜め方向の刷毛目が施されている。

時期は7世紀後半頃と思われる。



第10図 S H 3 8 平・断面図



第11図 SH38出土遺物実測図

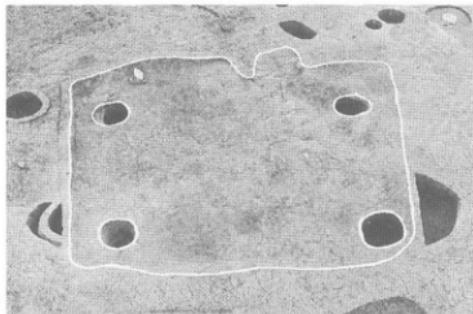
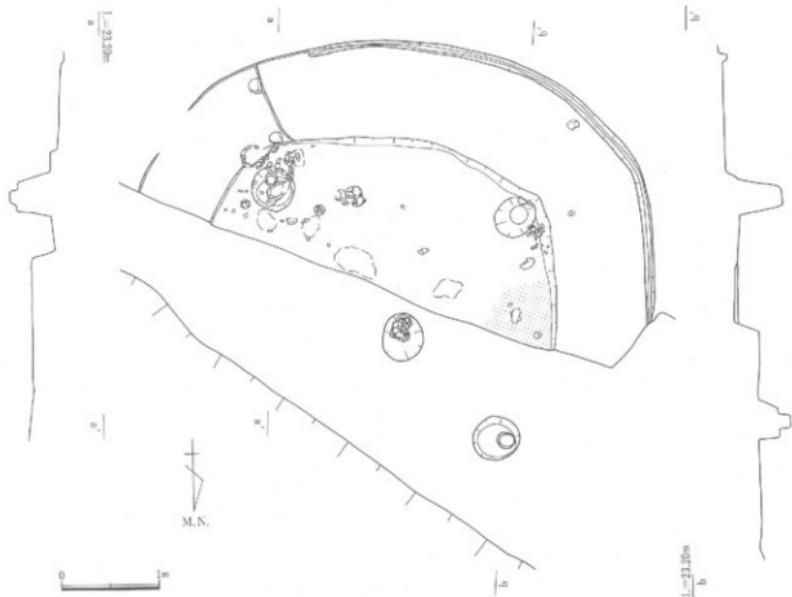


写真7 SH38検出状況(南東より)

#### SH42 (第12図)

SH42は第III調査区中央部で検出した竪穴住居である。北半分を旧流路によって削平を受けてはいるが、復原すると平面形態は円形を呈し、規模は復原径が約5.5mで、検出面からの深さは約0.12mを計る。検出された南半分から床面には内形が隅丸方形状のベッド状遺構があるものと考えられ、主柱穴はそのベッド状遺構のコーナーに計4個復原できる。また、周囲には



第12図 SH42平・断面図

幅の狭い壁溝が確認できる。ほぼ中央に炭が確認でき、削平を受けてはいるが、近接して土坑が確認されている。

竪穴住居内からは壺・甕などが出土している（第13図）。

土坑出土遺物（12～14）と床面直上遺物（15）を掲載する。

12・13は鉢である。12は小さい平底の底部から体部が内彎し、口縁部に至るものである。体部外面に細かい刷毛目が施されている。14は壺である。球形状の体部から「く」の字に頸部が屈曲し、口縁端部に至るもので、端部内面には凹線状のくぼみが認められる。体部外面は刷毛目が、内面はへら削りが施されている。15は甕である。頸部内面に明瞭な稜を持つもので、体部外面に叩きののち刷毛目が、内面には下方からのへら削りが施されている。

時期は弥生時代後期後半と思われる。

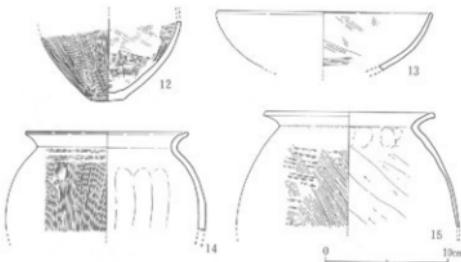
#### S H 4 4 （第14図）

S H 4 4 は第III調査区南部で検出した竪穴住居である。平面形態はほとんど角の取れた方形を呈し、規模は一辺が約4.6mで、検出面からの深さが約0.18mを計る。主柱穴は4本で、ほぼ中央に焼土及び炭の混じった炉を検出している。

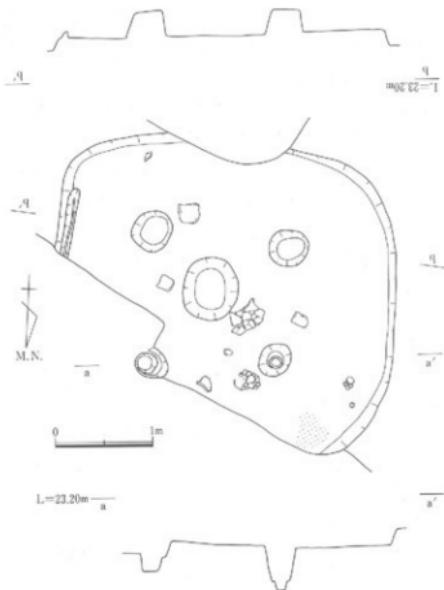
竪穴住居内からは壺・甕などが出土している。

床面上直上遺物（16）を掲載する（第15図）。

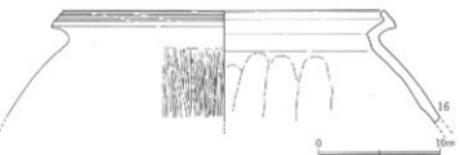
16は壺である。頸部は「く」の字に屈曲し、口縁端部特に上方をより長く拡張させる。端部外面には退化した凹線が4条認められる。体部外



第13図 S H 42出土遺物実測図



第14図 S H 44平・断面図



第15図 S H 44出土遺物実測図

面にはへら磨きが、内面には指なでが施されている。

時期は弥生時代後期前半と思われる。

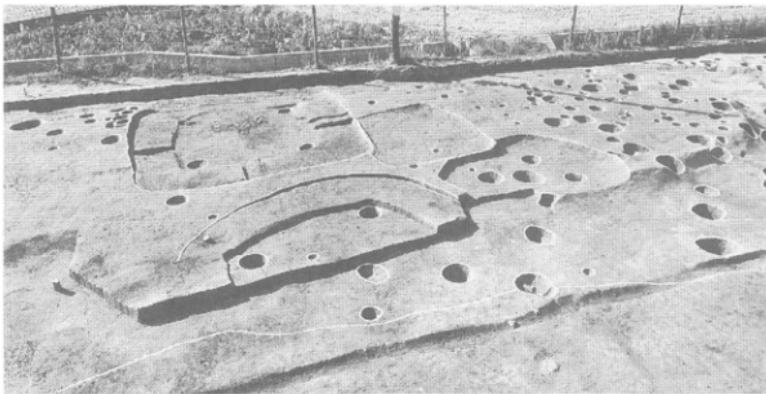


写真8 SH 35・42・43・44検出状況(北東より)

#### 掘立柱建物跡

掘立柱建物は全調査区で検出している。柱穴出土遺物より時期は弥生時代中期後半のものから中世にかけてのもので、その中で弥生時代中期後半に属するものの一部を報告したい。

弥生時代中期後半の掘立柱建物は、現在8棟確認している。そのほとんどが東西棟で、梁間1×桁行2間と梁間1×桁行3間の規模を持つ。柱穴は一辺1m前後の規模で、土層断面から柱の太さは直径20cm前後と推定される。

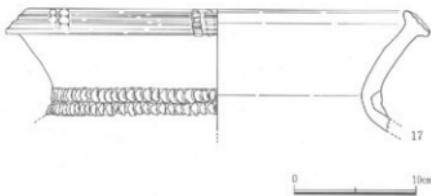
掘立柱建物はSB 01・02のように並列して建つものを除けばほとんどが1棟単独の検出で、その間隔もほぼ30m程度と規則的に配置されていることが確認できる。また、一部には同時期の竪穴住居と近接して確認できることから竪穴住居1棟に掘立柱建物1棟がセットとして集落が形成されていたものと考えられる。

#### SB 01 (第17図)

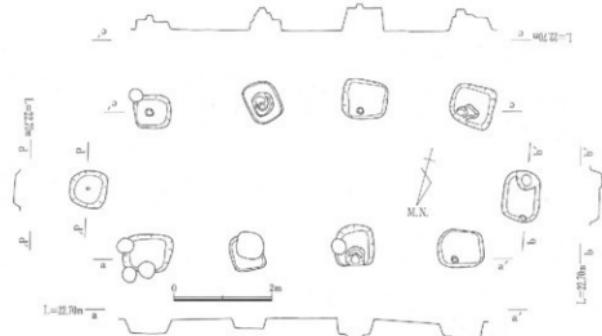
SB 01は第III調査区で検出したものである。規模は梁間1間×桁行3間(3.0m×6.4m)で、梁間側に棟持ち柱を持つ特異な掘立柱建物である。柱穴は一辺0.8~1.0mで、検出面からの深さは約0.4mを計る。ほぼ東西棟のもので、主軸(南北軸)はほぼ真北を取る。

#### SB 02 (第18図)

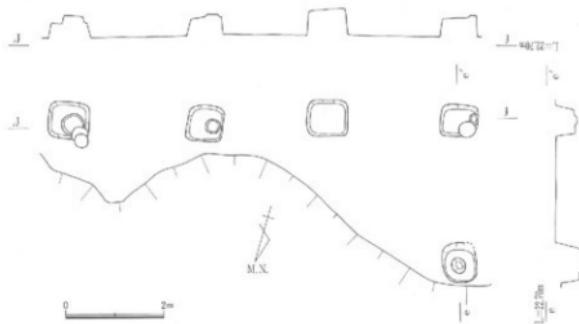
SB 02は第III調査区で検出したもので、SB 01と並立していたものと考えられる。規模は梁間(1)間×桁行(3)間(8.0m×3.0m)の掘立柱建物である。柱穴は一辺0.7~0.8mで、検出面からの深さは約0.5mを計る。ほぼ東西棟のもので、主軸(南北軸)は真



第16図 SP 706出土遺物実測図



第17図 SB01平・断面図



第18図 SB02平・断面図

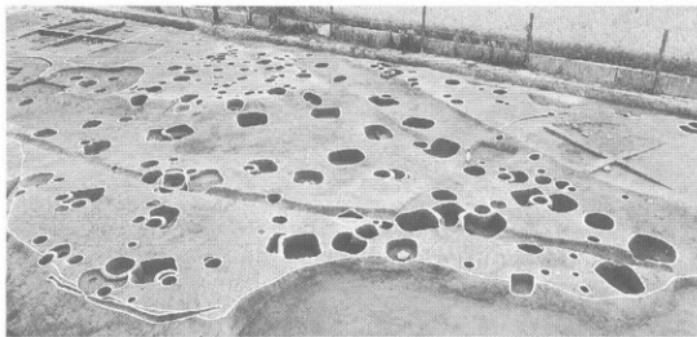
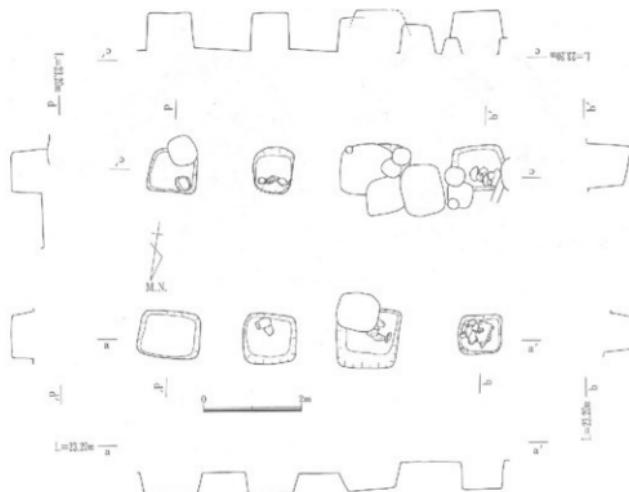


写真9 SB01・02検出状況(北より)



第19図 SB 03平・断面図



写真10 SB 03検出状況(北より)

北を取る。

17はSB 0 2を構成する柱穴S P 7 0 6から出土した。「く」の字に屈曲する頭部に指頭圧痕文凸帶をめぐらす。口縁部は上下に拡張し、外面に凹線を施し、その上に棒状浮文を付加する。

時期は弥生時代中期後半である。

#### SB 0 3 (第19図)

SB 0 3は第III調査区南部で検出したものである。規模は梁間1間×桁行3間(3.4m×6.4m)の掘立柱建物である。柱穴は一辺0.9~1.2mで、検出面からの深さは約0.7mを計る。ほぼ東西

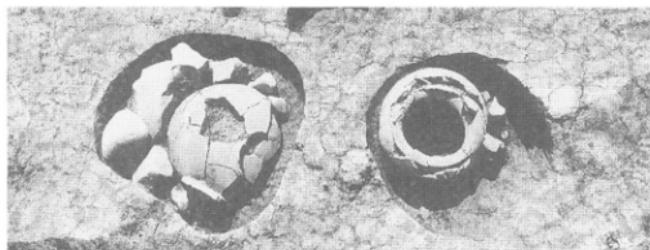
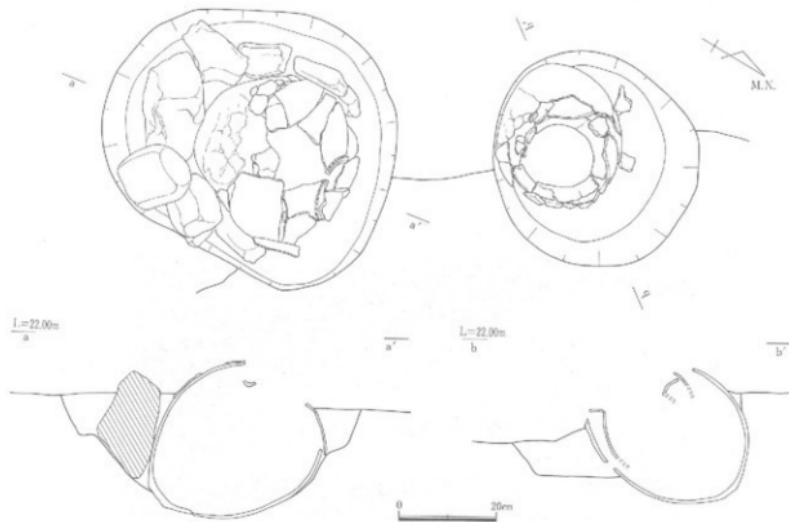


写真11 ST 01・02検出状況(東より)



第20図 ST 01・02平・断面図

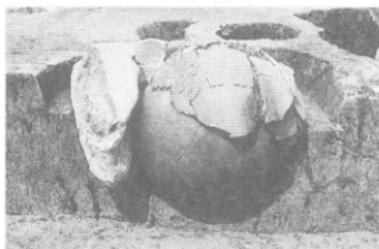


写真12 ST 02断面



写真13 ST 01断面

棟のもので、主軸（南北軸）はS T01・02と同様にはば真北を取る。柱穴には根石状に扁平な板石を底に配石するものがある。

#### 土器棺墓

土器棺墓は当遺跡で計3基検出した。その全てが第I調査区にあり、そのうち2基（写真11、第20図）が近接し、1基は単独で検出した。第II～IV調査区では同時期の遺構があるにもかかわらず土器棺墓などの遺構は検出していない。

#### S T01・02（第20図）

S T01・02は第I調査区中央部で検出した土器棺墓である。S T02は壺の体部上半を打ち欠き、別の壺の体部から上半を被せたもので、斜めに寝かした状態で埋められていた。また、その周囲には体部と底部に接するように石を配石している。最上部から鉢の口縁の一部が出土していることから頸部に鉢を被せていた可能性がある。

壺棺内からは、骨片が出土している。

時期は弥生時代後期である。

#### 柱穴

#### S P198（第21図）

S P198は第III調査区南部で検出したやや大きめの柱穴である。平面形態はやや歪な隅丸方形を呈し、一辺約2mを計る。検出面からの深さが約0.18mを計る。

18は壺で、壺に転用されたものである。平底の底部から内縁気味の体部になり、口縁は如意状を呈する。口唇部には刻目が施されている。底部は穿孔されている。19は鉢である。平底の底部から内縁気味の体部になり、そのまま終わらせるものである。

時期は弥生時代前期である。

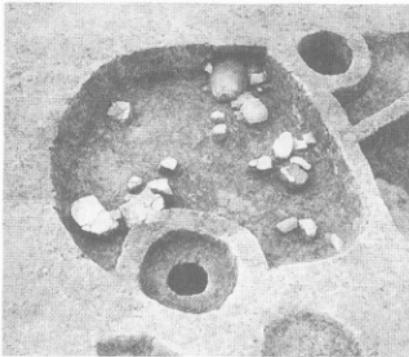
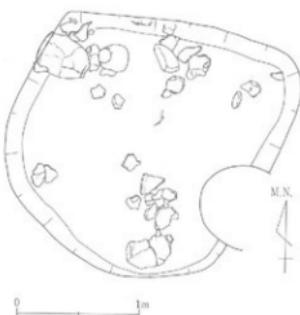
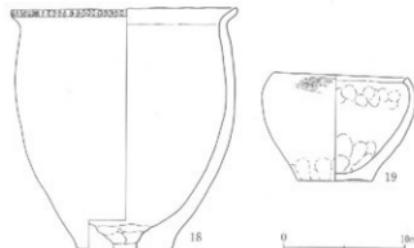


写真14 S P198検出状況(南西より)



第21図 S P198平面図



第22図 S P198出土遺物実測図

### 3. まとめ

調査の結果、弘田川西岸遺跡は縄文時代後期と弥生時代前期から中世にかけての集落であることがわかった。

縄文時代の遺構は検出できなかったが縄文時代後期の土器が多く出土していることから、近接して同時期の遺構の存在が推定できる。また、同じ善通寺平野で四国横断自動車道建設に伴い発掘調査を実施した永井遺跡では多量の縄文土器と共にどんぐりの灰汁抜きを行ったと思われる資料が出土していることからかなり広範囲にわたって縄文時代の集落が存在していたことが考えられる。

当遺跡の主要な遺構は弥生時代中・後期で、竪穴住居67棟とかなりの大集落であったことが推定できる。

弥生時代前期の遺構はあまり検出できなかったが、近接する甲山北遺跡との関係が今後検討課題である。

弥生時代中期の遺構は、竪穴住居・掘立柱建物と柱穴を多数検出した。その結果竪穴住居1棟と掘立柱建物1棟がセットであった可能性が考えられる。

弥生時代後期の遺構も中期の遺構と同様に多数の竪穴住居・掘立柱建物・柱穴を検出した。この地域は我拝師山を中心に発見されている青銅製品（銅鐸・銅劍・銅矛）の分布密度の高い地域で、当遺跡で出土した小銅鐸や磨製石剣との関連が注目できる。

今後当遺跡で検出した弥生時代の遺構を検討することによって弥生時代前期から中期を通して旧練兵場遺跡の範囲及び善通寺平野での集落変遷を考える重要な遺跡であることが判る。

古墳時代後期及び7世紀の遺構は、弥生時代に比べるとあまり検出していない。しかし、古墳時代では金銅製冠帽の出土した王墓山古墳や人物・船などの線刻壁画が発見された宮尾古墳に代表されるように400基を越える古墳が造られている地域で、古代には佐伯氏の氏寺である中村庵寺（善通寺）が造られる地域である。

このように善通寺平野は縄文時代から古代・中世・近世と遺跡が確認でき、香川県においても中讃地域の拠点集落であることが判る。今後当遺跡の発掘調査の成果や周辺での発掘調査の成果を総合的に検討することが重要と考える。

## 報告書抄録

ふりがな	ひろたがわせいがんいせき						
書名	弘田川西岸遺跡						
副書名							
巻次							
シリーズ名	弘田川改修工事に伴う埋蔵文化財発掘調査概報						
シリーズ番号							
編著者名	片桐孝浩						
編集機関	(財)香川県埋蔵文化財調査センター						
所在地	〒762 香川県坂出市府中町南谷5001-4				TEL 0877-48-2191		
発行年月日	西暦 1996年 3月 31日						

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コ	ー	ド	北緯	東経	調査期間	調査面積 m <sup>2</sup>	調査原因
		市町村	遺跡番号						
ひろたがわせいがん 弘田川西岸遺跡	かがわけんぜんつうじし 香川県善通寺市 ぜんつうじちょう 善通寺町	37204			34°13'29"	133°46'17"	平成7年 4月1日～ 平成7年 11月30日	5,231m <sup>2</sup>	弘田川改修 工事

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺跡	特記事項
弘田川西岸遺跡	集落跡	縄文時代後期 弥生時代前期～後期 古墳時代後期 7世紀 中世	壁穴住居 掘立柱建物 土坑 土坑墓 柱穴 自然河川	縄文土器 弥生土器 土筋器 須恵器 瓦器 砥石 磨製石劍 勾玉 ガラス玉 小銅鐸 銅鏡 铁斧 石鎧	

弘田川改修に伴う  
埋蔵文化財発掘調査概報  
**弘田川西岸遺跡**

平成8年3月31日

編集 (財)香川県埋蔵文化財調査センター  
発行 香川県埋蔵文化財研究会  
印刷 セキ株式会社